【ポスター発表】

韓国の中学生における盲導犬の理解と啓発効果

○　東京農工大学　　甲田菜穂子（005914）

キーワード：韓国・盲導犬・啓発

１．研 究 目 的

盲導犬は視覚障害者の歩行を助けるために訓練された補助犬であり、世界各国で使用者の生活を支援している。韓国の盲導犬事業は 1993 年にサムスン案内犬学校が設立されることで始まり、現在およそ 80 頭が実働している。盲導犬を普及させるために、街中のイベント、テレビや映画、書籍、ポスターなどによる様々な啓発が行われており、近年にはインターネットを通じたマスコミ主導の啓発への接近が容易になっている。しかし、施設での盲導犬受け入れ拒否、盲導犬と使用者に対するマナー不足などが課題として残っている。視覚障害者の社会参加を支援、促進する盲導犬を普及させるには、一般市民の理解が不可欠である。韓国で、一般市民を対象に行った盲導犬に関する認識の調査は 2001 年の石上らの調査以外、ほとんどない。また、中学生を含む若者向けの教育的取り組みは、個人と社会において、成人向けの啓発よりも大きな影響力を持つ可能性がある。本研究は、まず先行調査として、韓国で行われた中学生が触れる頻度が高いテキスト・イメージ混合型の啓発内容の現状を調べた。次に、盲導犬に関する中学生の知識の程度や啓発状況と、リーフレットによる啓発前後の認識及び理解度の変化を調査した。

２．研究の視点および方法

先行調査では、Google のイメージ検索を用い、2015 年～2021 年 5 月にインターネット上に公開された 39 件(2020 年以前 20 件、以降 17 件、不明 2 件)のカードニュース(37)、ポスター(1)、リーフレット(1)による盲導犬啓発資料を抽出し、内容分析した。

次に、ソウル近郊の中学校 2 校の生徒 282 名を対象に、無記名の質問紙調査を 2022 年に実施した。調査項目は、回答者の動物飼育経験、情動的共感性、援助規範意識、盲導犬に関する知識などであった。啓発資料を読む前の質問紙の回答で個人の経験と盲導犬認識の現状を把握し、本研究のために制作したリーフレットを用いた啓発の前後で盲導犬に関する知識を比較し、啓発効果を検証した。

３．倫理的配慮

本研究は、東京農工大学人を対象とする研究に関する倫理審査委員会（220804-0427）と中学校の承認を得た。本報告に関連し、開示すべき COI 関係にある企業等はない。

４．研 究 結 果

韓国の啓発は、盲導犬に対するマナーに関する啓発が多く、2020 年の盲導犬パピーへの入店拒否事案以降は、盲導犬の法律と、施設での盲導犬の受け入れに関する啓発が増加した。一方、視覚障害者のこと、盲導犬の仕事内容やできることに関する啓発はほとんどなかった。また盲導犬の仕事は、自己犠牲、遊びのようなもの、と相反する内容もあった。盲導犬は、視覚障害者の「心のささえ」よりも「身体の一部」とみなす啓発が多かった。

質問紙調査では、盲導犬との接触経験では、回答者の 29%が実際に見たことがあると回答し、2001 年の調査から 20%増加した。盲導犬との接触経験と盲導犬に関する知識間の有意な関連は見られなかった。「視覚障害者の目の代わり」、「特別な訓練を受けたイヌ」といった盲導犬に関する基本的な知識は高い正答率を示したが、盲導犬の具体的な仕事内容や視覚障害者に関する理解は低かった。特に、「盲導犬は視覚障害者の心のささえ」の正答率は 51%に過ぎなかった。「盲導犬と公共施設が利用可能」（84%）、「盲導犬に会った時のマナー」（69%）に関する知識は正答率が高く、石上らの 2001 年の調査での正答率から大幅に増加した。リーフレットによる啓発後、盲導犬に関する知識の平均正答率は 50%から 76%に上昇した。特に、盲導犬の仕事内容やパピーウォーキングに関する項目で大幅に上昇した。一方、「盲導犬は視覚障害者の心のささえ」は、啓発後も 69%にとどまった。動物飼育経験のある生徒（71%）は、そうでない生徒に比べて盲導犬に関する知識スコアが有意に高く、啓発後の正答率も有意に高かった。動物飼育経験者は情動的共感性が有意に高く、援助規範意識との有意な関連は見られなかった。

５．考 察

2001 年の先行研究と比較すると、本研究では、盲導犬との接触経験や盲導犬に対するマナーの理解が向上していた。盲導犬の増加や、マスメディアによる啓発により、社会の認識が高まっていると考えられる。しかし、盲導犬の具体的な仕事内容や視覚障害者への理解は依然として不十分であった。リーフレットを用いた啓発活動は、短時間でも効果的であることが示されたが、既存の知識や社会の偏見が介在する可能性のある項目に関しては効果が限定的であった。より効果的な啓発のためには、教師や啓発者による解説を加えるなど、学習への参加をより促進させるプログラムの工夫や改善が必要である。韓国の中学校では、ボランティア活動が教育課程に組み込まれている。一方、動物飼育経験が盲導犬への理解に正の影響を与えており、日常的な動物との関わりや動物に関する教育が、盲導犬への理解促進につながる可能性が示唆された。今後の課題として、啓発効果に影響する他の要因の探索、長期的な効果の検証、盲導犬の心理的利点を含めた多角的な啓発内容の検討が挙げられる。

謝 辞：本研究は、李恩智氏のご協力をいただきました。